

一昨年天理参考館創立90周年特別展「スポーツの歴史と文化」に関連して、本誌でスポーツにまつわる事柄を取り上げた。そのときは「走る」だったが、期間を空けた今回は「歩く」に注目したい。11月は残暑も落ち着き、本格的な冬將軍の到来まではまだ猶予があって、スポーツを楽しむのに格好な時期といえる。近年はマラソンやジョギングを楽しむ、というか本格的に取り組む人びとが多い。「走るのはちょっと…でも健康のために歩いています」という健康志向ウォーキング派も多数存在する。現代は健康のために意識的に「歩く」が、交通手段が限られていた前近代までは、移動の手段として自分の足で「歩く」しかなかった。最近、江戸時代の大名の日記を読み解く機会があり、身分制社会の上層にいた彼らが「歩く」姿が頻出することに驚かされた。物々しく駕籠で御成になるとばかり思っていたが、さにあらず。黄門様よろしく、お供の者を従えて江戸の町をそぞろ「歩く」のである。これを紹介したい。

“大名”と既述したが、正確には“隠居した大名”で、跡目を譲れば比較的自由的な行動が許された。そのご隠居様とは大和郡山藩15万石第2代藩主柳澤伊信で、致仕(隠居)後に信鴻と称した。500石の知行から大老格にまで破格の立身を遂げた吉保が祖父で、父吉里の代に甲府から大和に国替えとなった。つつがなく28年間に及ぶ治世を終え、江戸の六義園での隠居生活

を詳細に綴った『宴遊日記』が今回の拠り所である。その華やいだネーミングに似つかわしく、観劇に興じてご鼠員の役者に執心したり、俳諧を楽しんで仲間



特別名勝 六義園(東京都文京区) 2022年5月撮影

と盛大な句会を催したりと多種多芸で優雅な生活が綴られている。信鴻の時代は、文化の中心が上方から江戸へと移りつつあった頃で、この50年後に江戸文化が爛熟する文化・文政期を迎えるのである。筆まめな彼の記述は、まず毎日の天候の記録から始まる。単に「晴れ」「曇天」だけではなく、何時頃から曇り始めたか、その日がいかに「季節外れの寒さだった」か、「落雷で肝をつぶし」、「×刻に発生した地震」がその後何度余震を繰り返したか等々が克明に記載されており、気象学の見地からも貴重なデータと評価されている。さらには、江戸で交流のあった文人大名たちや親族、家臣、出入りの職人など多くの人びととの交流、六義園で開催される折々の年中行事、信鴻自ら先頭に立っての芝居舞台設営と上演、社寺参詣、園芸趣味、当時のまじない、果ては園内に侵入した泥棒の捕り物顛末まで、まったくもって多岐にわたる興味深い記事が満載の日記なのである。ゆえに、俳諧の潮流、演劇史、植物学、社寺参詣の趨勢など、各専門分野にとって第一級資料の宝庫となっている。

そのなかで、家来を連れて上野や日本橋に繰り出し、買物や食事を楽しむ場面もたびたび登場する。私も上京の折、追体験を試みた。安永13年3月朔日の条より、家来7名を連れて六義園(文京区)を出発し、駒込富士神社(富士山が綺麗に見られる名所)を通過して、現在の本郷通りを経て湯島聖廟を拝した後、上野広小路の人形店に立ち寄り(雛人形の値段が折り合わない)ので御成小路から神田、今川橋を歩いて日本橋十軒店(現在の三越日本橋本店のあたり)の雛市を巡るという行程だ。実に片道2時間を越えるハードな道のり(10km程度)で疲労困憊した。帰路は駕籠に乗ったようだが、当時の人の健脚ぶりに頭が下がる。この日は桃の節句に近いことと雛市が大層賑わっており、信鴻は「通り左右店のうしろより人にもまれ」唐木屋という有名な雛人形店に入る。15万石の隠居大名が「人にもまれ」通りを歩くことが現実であり、服装や挙措動作で高い身分の侍と認識できたであろうに(できたからこそ)、店側は値段交渉に応じないため、さらに遠い店まで足を伸ばすところが興味深い。このとき会った「知己の惣髪細工人」が著名な雛人形師初代原舟月と考えられる。信鴻は、進取の気風に富んだ舟月の雛人形が大のお気に入り、何度も手に入れている。

この日以外でも、お腹が痛い  
と苦しむ行商人に手持ちの薬を分け与えたり、蕎麦を食べたいからと回り道をしたり、ウォーキング途中のエピソードに事欠



古今雛 江戸時代 全高27.0cm(天理参考館蔵)  
信鴻が鼠員にしていた舟月が考案した、大型で華やかな江戸っ子好みの雛人形。

なにせ六義園は広大な庭園なので、移り住んだ当初は園内を散策して道に迷ったこともあったらしい。帰りが遅いことを心配して、家来が迎えに来たので「事なきを得た」こともあった。知り合いが美しい六義園の評判を聞いて見学を希望すると、町人や家来の家族であっても自ら案内することもあった。フットワークの軽なお殿様なのである。歩くことが健康維持につながったのだろう。亡くなる直前まで日記を記し、知人を引き連れ六義園を案内している。しかし突然絶筆、倒れたらしい。寛政4年3月3日、奇しくも雛人形を愛でた人に似つかわしく、雛の節句に愛した六義園で69歳の生涯を閉じた。「歩く」ことに努めた賜物か、当時としては長命といえる。



次郎左衛門雛 江戸時代 全高9.0cm(天理参考館蔵)  
丸顔に引目鉤鼻の雛人形。旧大名家に多く伝わるため、信鴻も買い求めていたと思われる。